

株式会社 遊文舎

●代表者／代表取締役社長 木原 庸裕 ●創業／1969年4月 ●従業員数／50名
●所在地／大阪市淀川区木川東4-17-31 ●URL／www.yubun.co.jp

汎用性高く 環境に対応 数多くの機能使いこなす



木原社長



本郷執行役員

(株)遊文舎は、書籍・カタログ・Web制作のプロフェッショナル集団として知られる。ハイブリッドワークフロー「XMFシステム」の採用により、プリプレスワークフローを飛躍的に進化させ、生産の効率化やコスト削減を図るとともに、サーマルCTPや刷版の完全現像レス化などに取組み、制作環境の改善にも力を入れている。

同社は1969年(昭和44年)、大阪府吹田市で「出版会四季」「木原印刷所」として同時に創業。株式会社への改組を経て、1999年(平成11年)に社名を現在の名称に変更し、デザインから製本まで手掛ける印刷会社として、こんにちに至っている。

XMFについては、2013年(平成25年)暮れにワークフローRIP「XMF Smart」、2015年(同27年)1月にはWebポータル「XMF Remote」を導入。CTPの刷版機を更新する際に他社製品を含めて検証した結果、最終的に富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)(FFGS)の製品を採用することにした。環境対応に優れ、間接コスト、ガム洗浄や廃液を撤廃できることから、先を見据えての設備投資であったという。

木原社長は「ワークフローRIPを更新して、その付加価値としてFFGSから提案してもらったのが『Remote』である。営業が介在していたフローを、



数多くのXMFの機能を使いこなす

ワークフローRIPの中に取り込めるところに可能性を感じ、導入を決断した」と経緯を述べる。

本郷正幸執行役員は、「クライアントも含め、だれでもアクセスができ、いろいろな作業がこなせるRIPを考えたときに、もっとも汎用性のあるのがXMFだった」と語る。

導入後について本郷執行役員は、「XMFは機能を組み合わせれば数多くのことができるため、最初の2カ月間は試行錯誤の繰り返しだった。メンバー全員で練習用のテンプレートを作りながらさまざまな機能を試行錯誤し、毎週ミーティングも行った。慣れてしまえば使いやすく、さまざまなことができることから社内の評判も非常にいい」と満足げ。

また木原社長は、「当社の労働分配率は55%と比較的高い。1人ひとりのコストや時短の意識が経営に直結してくる。ワークフローRIPを更新してオートローダーを導入し、刷版の出力ソフトを増やただけで生産性が大幅に改善され、営業も含めて社内の士気が上がった」と効果を語る。

たとえばページ物の面付けの場合、他社の面付け専用ソフトとほぼ同等のことができる。プリプレスに必要な作業がXMFで完結でき、作業時間はかなり短縮できたという。以前はプリプレス部門だけが行っていた出力作業も、テンプレートを選択するだけで簡単

に行えるため、今は生産管理の担当者でも出力作業ができる。

実際、遊文舎のプリプレス部門のメンバーのうち3人は、制作部門のメンバーだった。プリプレス部門長でもある本郷執行役員も、もともとデザイナーだった。プリプレス部門のメンバーは出力作業を行うという役割から、XMFを使ってテンプレートを設計するなど、運用ルールを考える役割に変わった。

「ワークフローRIPを活用するには、運用にマッチしたテンプレートを設計することがポイント。テンプレート設計がしっかりしていれば、だれでも簡単にXMFを使いこなせる」と本郷執行役員は断言する。

また、「XMF Remote」についても東京営業所と本社とのやり取りを皮切りに活用し始めている。

最後に木原社長はこう述べた。

「プリプレス工程が消滅しつつあり、もしかするとデジタル化が進んで刷版も消滅まではいかなくても減少していく可能性がある中で、プリプレスのエキスパートやオフセットのオペレータも多能工化していくべきだろう。デジタル印刷機や加工技術も習得しなければいけない。印刷業界全体のテクノロジーの進化とともに、スタッフも現状に甘んじることなく新しい技術を習得していく。そういう風土づくりが肝要で、XMFの導入がその象徴的な契機になったといえる」